

「バレたらどうしよう」気にする日々 加害者家族を考えるシンポ

柿崎誠 社会 | 速報 | 神奈川 | 関東

毎日新聞 | 2023/12/3 19:13 (最終更新 12/3 19:13)

有料記事 1243文字



シンポジウムに参加した（左から）長男（仮名）、NPO法人「ワールドオープンハート」の阿部理事長、NPO「スキマサポートセンター」の佐藤理事長、大阪経済大の坂野教授＝横浜市で2023年11月5日、柿崎誠撮影

子どもに罪はない——。その言葉とは裏腹に加害者家族は、社会の厳しい視線にさらされがちだ。そんな現状を知つてもらうためのシンポジウムが、横浜市内であった。1998年に和歌山市で発生した毒物カレー事件の時に10歳だった林真須美死刑囚（62）の長男（36）が登壇し、「顔を隠さないと生きにくい。バレたらどうしようと気にする日々が25年続いている」などと実情を明かした。

11月5日にあったシンポは、加害者家族支援のNPO法人「スキマサポートセンター」（大阪市）が主催し、大阪経済大の坂野剛崇教授が進行役を務めた。同

センターによると、2015年の設立以降、寄せられる相談では子どもを心配する内容が最も多いという。転校や学費、学校でのうわさなどの教育関連▽進路、就職、結婚など将来への影響▽名字を変える——などだ。

「子どもに罪はない」

加害者家族の子どもは、事件を機にストレスから、夜尿や自傷行為をするようになつたり、不登校になつたりするケースがある。また周囲に対して過度に明るく振る舞つたり、逆に気が沈む状態になつたりするなど、精神的に不安定になることも少なくない。臨床心理士で同NPO理事長の佐藤仁孝さん（41）は「運命に翻弄（ほんろう）される子どもを見てきたが、子どもに罪はない」と訴えた。

聞いていた長男は「まるで自分のことのよう。楽しいとかの感情がなくなった」と自身の経験を振り返った。両親の逮捕後、4人きょうだいで入った児童養護施設では上級生らから暴力を受けた。事件では夏祭り会場でカレーを食べた住民が相次いで倒れた。このため食事にカレーが出ると、周囲から「いただきます」のあいさつをするよう求められた経験は特に嫌だったと明かす。

自宅の外壁は嫌がらせの落書きが書かれるようになり、その後、自宅は放火されて全焼した。長女は高校の入学初日にマスコミにつきまとわれ、耐えられず退学した。19年からは自身のX(ツイッター)などに母との面会や思いを素直に投稿している。だが、率直に「つらい」と吐露すれば、「本当につらいのは被害者だ」と批判されるという。

「国が積極的に発信を」

08年に国内でいち早く加害者家族の支援に乗り出した仙台市のNPO「ワールドオープンハート」(WOH) 理事長の阿部恭子さん(45)は「犯罪の数だけ家族がいるのに、かつては情報が乏しく、加害者家族は存在しないかのように扱われてきた」とし、「犯罪者が人ではないような社会の見方が家族にも影響している」と問題提起する。WOHは、家族に代わって報道対応や間違った報道や情報による家族への非難を是正する情報発信にも取り組んでいる。

参加者から、公的支援の在り方を問われた阿部さんは「法務省が加害者の家族への差別をやめようと積極的に発信することはすぐにできる」などと提案した。

長男はシンポの最後をこう結んだ。「私は不幸という前提で見られるけれど、つらさを乗り越えて生きようと頑張っていることも伝えたい」【柿崎誠】

毎日新聞のニュースサイトに掲載の記事・写真・図表など無断転載を禁止します。著作権は毎日新聞社またはその情報提供者に属します。画像データは(株)フォーカスシステムズの電子透かし「acuagraphy」により著作権情報を確認できるようになっています。

Copyright THE MAINICHI NEWSPAPERS. All rights reserved.